

河南省安陽市郭家莊 160 号墓からみた 殷墟の墓制について

小 澤 正 人

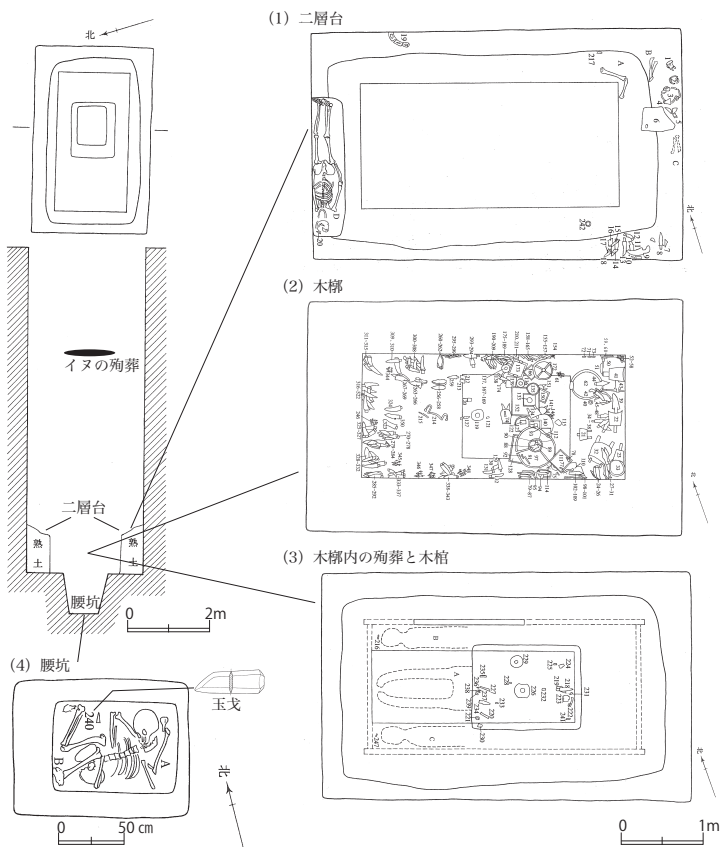
中国河南省安陽市に位置する殷墟遺跡は、紀元前 2000 年紀後半に黄河中流域に成立した殷王朝の中心であり、人口が集中した大型の遺跡であるとともに、土木建築技術や工芸技術、さらには文字記録などの高度な技術体系の蓄積がみられ、同時代では突出した存在である。従って、中国における国家形成期としての殷王朝の性格を明らかにするためには、その構造の解明が必要不可欠である。殷墟遺跡では 1920 年代から継続した調査が行われており、特に墓葬は調査数も多く、資料が蓄積されている。発掘された墓葬には王墓と考えられる大型の陵墓から遺体のみを安置するような小型墓まで多様な階層の墓葬が含まれている。そのため墓葬の研究は殷墟の構造を考えるためには有効な手段となっている¹⁾。

このような視点から、筆者は殷王墓の墓制について検討を行い、その一端を明らかにした²⁾。ただし王墓はその全てが盗掘を受けており、副葬品や細部の構造が不明なため、殷墟の墓制を考えるうえで不明確な部分が残った。そこで王墓に次ぐ規模をもつ中型墓を検討することを通して王墓の墓制を類推する可能性を考え、その一端として殷墟第 4 期の大司空村 303 号墓の検討を行った³⁾。本稿はこのような殷墟遺跡中型墓研究の一環であり、先の大司空村 303 号墓から時期的に先行する殷墟第 3 期の郭家莊 160 号墓を取り上げ、その墓制を明らかにすることを目的とするものである⁴⁾。

1 郭家莊 160 号墓の構造（第 1 図）

郭家莊遺跡は宮殿区の東南 1.5km に位置し、1982 年から 1992 年にかけて調査が行われ、200 基近い墓葬が発掘された。160 号墓は発掘区の北側にあり、1990 年に調査が行われている。

郭家莊 160 号墓の規模は、現状で墓口が南北 4.5m、東西 2.88 ～ 3.04m、



第1図 墓葬構造

墓底までの深さは8.0m、墓底の規模は南北4.65m、東西2.74～2.84mを測る。墓底には熟土二層台が確認できる。二層台は外台と内台からなり、外台は幅約0.12～0.3m、高さは約1.12m、内台は幅0.25～0.33m、高さ0.88mを測る。さらに墓底には腰坑が掘られており、坑口部で長さ1.35m、幅1.03m、坑底部で長さ0.95m、幅0.68m、墓底からの深さ1.0mを測る。墓坑埋土は版築されており、版築層の厚さは約0.1mである。

墓坑底部には木槨が置かれ、木槨内には木棺と副葬品が安置されていた。木槨はほとんど腐食していたが、漆皮や木灰などの痕跡から長さ

3.26m、幅 1.64m、高さ 1.1m と推定されている。槨室板は長さ 3.26m、幅 0.12 ～ 0.17m の板が 7 枚確認されている。板には数層の漆が塗られており、赤漆を基本とし、黒漆と白漆も確認されている。槨蓋はすでに腐食し、槨室内におちこんでいた。蓋板表面には漆が塗られており、さらに絹布の痕跡も確認されている。報告者は木槨上に絹織物がかけられていたとしている。

木棺は槨室中央の西側にあり、槨室西壁に接して置かれていた。木棺もほとんど腐食していたが、漆皮が確認されている。漆は黒漆を基本として、赤漆も使われていた。木板の痕跡から、大きさは長さ 2.5m、幅 0.83m と推定されたが、高さは不明である。木棺の板は 6 枚が確認され、幅は木槨と同じ幅 0.12 ～ 0.17m を測る。被葬者は木棺中央に置かれ、遺体は伸展葬で、頭位方向は東とされた。遺体は骨粉状となっており、被葬者の性別・年齢は不明である。

2 副葬品と殉葬の出土状況

副葬品と殉葬は (1) 腰坑内、(2) 木槨・木棺内、(3) 二層台上・木槨上、(4) 墓坑埋土中で検出されている。本章ではそれぞれの場所での出土状況についてみてゆく。

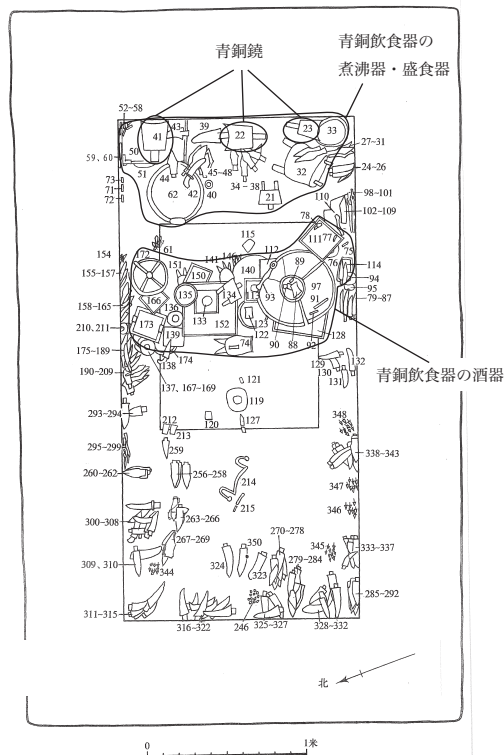
(1) 腰坑内 (第 1 図 (4))

腰坑内には人と犬が殉葬されていた。副葬品としては玉戈があり、殉葬者の持ち物であったと考えられる。

(2) 木槨・木棺内 (第 2 図)

木槨内には殉葬と副葬品がみられた。殉葬者は木槨底部で木棺を挟むように 2 体が確認された。頭部で骨簪が確認されている。骨は粉末になっており、性別・年齢などは不明である。

副葬品は槨内全体で確認されている。木槨東側、被葬者の頭部には礼器のうち、青銅飲食器の煮沸器・盛食器、楽器の青銅鐃が置かれていた。木槨中部やや東側、位置的には木棺北部上と考えられる位置には、礼器のうち青銅飲食器の酒器がまとまって置かれていた。また同じ位置には陶器の罐が置かれていた。青銅武器は木槨全体に置かれている。車馬具



第2図 木槨内の副葬品

は木槨西部で、木棺上に置かれていた。

木棺内の遺物は腰坑上部から検出されている。玉器・石器・青銅鏡・青銅刀子などが出土している。

(3) 二層台上・木槨上 (第3図)

殉葬は二層台上と木槨上で確認された。

二層台上では殉葬者が1体確認されている。殉葬者は二層台西部の墓坑壁面に掘られた浅い土坑に安置されていた。位置関係から身体の一部は木槨上にかかっていたと考えられる。殉葬者は成年男性と考えられ、朱が塗布されていた。頭部からは骨簪が出土している。木槨上には殉犬が1頭確認されている。

(4) 墓坑埋土中（第1図）

墓坑埋土中では、墓口から 2.45m の深さで犬の骨格が 1 体分確認されている。

3 木槨・木棺内の副葬品について

郭家荘 160 号墓では、副葬品の大部分は木槨・木棺内から出土している。ここでは、木槨・木棺内から出土した副葬品について、推測される用途をもとに概観する。

(1) 飲食器（第4図1～38、第6図）

飲食器には青銅器と陶器がある。

① 青銅器（1～30）

青銅器は祭儀に使われた「礼器」と考えられる。想定される機能から、煮炊器、盛食器、酒器に分類される。

1) 煮炊器

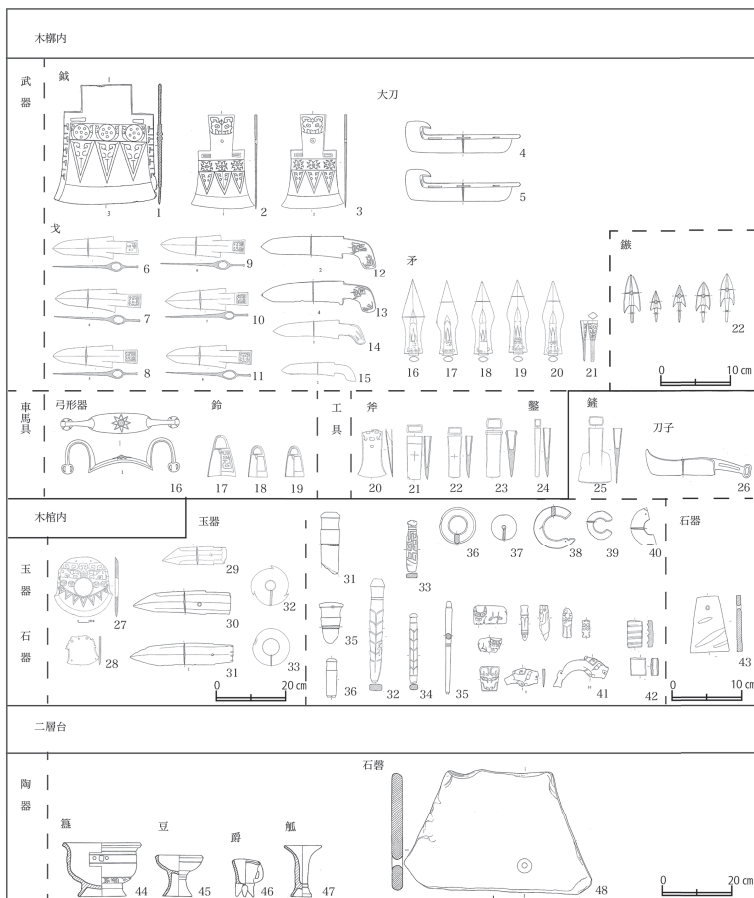
煮炊器には鼎（1～5）、甗（6）、方形器（7）がある。鼎には大円鼎（1）、分裆鼎（2・3）、方鼎（4・5）がある。大円鼎は大型で 1 点のみ出土した。底部にはススが付着しており、発掘時には牛骨二十数点が入っていた。器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。分裆鼎・方鼎は小型で、それぞれ同型のものが 2 点ずつ出土している。分裆鼎には、2 点とも底部にススが付着し、1 点からはブタの肋骨 9 本が出土した。器内に「亜稟址」銘が鑄込まれていた。方鼎の器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。甗は 1 点のみが出土している。甗内部から炭化したクリの葉が出土している。方形器は甗の上に置かれており、報告者は食物を焼く器具か食物を盛る器物と推測している。方形器には両耳がついている。160 号墓から出土した煮炊器には両耳があり、盛食器には両耳がないことから、本稿では煮炊器に分類しておく。

2) 盛食器

盛食器には圈足をもつ簋（8）・盤（9）・有蓋提梁鼎（10）がありそれぞれ 1 点が出土している。簋には器内に「亜稟址」銘が鑄込まれていた。



31 (72)

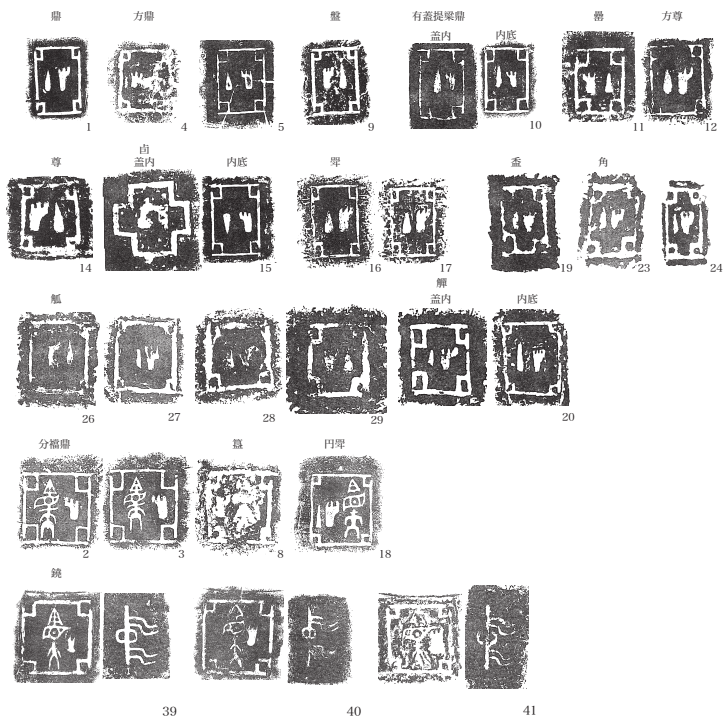


第5図 副葬品 (2)

盤には器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。有蓋提梁鼎には完全には腐食していない豚肉、皮、肋骨が入っていた。蓋内と内底に器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。

3) 酒器

酒器には蔵酒具、温酒具、飲酒具がある。蔵酒具は大型の罍 (11)・方尊 (12・13) と小型の尊 (14)・卣 (15) がある。罍は1点が出土し、器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。方尊は同型のものが2点出土している。12には器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。尊・卣はいずれも1



第6図 図象銘（青銅器は第4図と同じ。縮尺不同）

点が出土している。尊は器内に、缶には蓋内と内底に器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。温酒器には罍（16・17）・円罍（18）・盃（19）があり、いずれも把手をもつ。罍が同型のものを2点出土する以外は、いずれも1点のみが出土している。罍と盃には器内に「亜址」銘が、円罍には器内に「亜窠址」銘が鑄込まれていた。飲酒器には角（21～25）・觚（26～30）・觶（20）がある。このうち角と觚は同型のものがそれぞれ10点出土している。いずれも器内に「亜址」銘が鑄込まれていた。觶は1点のみが出土している。蓋内と内底に「亜址」銘が鑄込まれていた。

② 陶器（31～38）

陶器としては罐12点が出土している。出土地点は青銅器の酒器と同じ位置である。

(2) 楽器

楽器では青銅鏡3点が副葬されている(第4図39～41)。内壁には「亜甕址」銘が、下部には「中」銘が鑄込まれていた。

(3) 武器 (第5図1～22)

武器はいずれも青銅製で、鉞(1～3)、大刀(4・5)、戈(6～15)、矛(16～21)、鏃(22)が出土している。鉞は大型のものが1点(1)と小型のものが2点(2・3)出土している。大刀は2点が出土している。戈には盞内戈(9～11)と曲内戈(12～15)が出土している。盞内戈は103点が出土している。曲内戈は16点が出土している。曲内戈には報告者により明器とされたものが含まれる。矛は97点が出土している。鏃は906点が出土している。

(4) 車馬具 (第5図16～19)

車馬具としては弓形器が1点出土している(16)。出土位置から、木棺上に置かれていたと考えられる。このほか車馬を飾る鈴が出土している(17～19)。

(5) 工具 (第5図20～26)

工具は青銅製で、斧(20～23)・鑿(24)といった木材加工具、土掘り具としての鍬(25)、刀子(26)が出土している。木材加工具は木棺内から、鍬・刀子は木棺内から出土している。斧の一部は方罍内から出土している。

(6) 玉器・石器 (第5図27～43)

玉器・石器の玉器には武器型玉器として玉鉞(27・28)・玉戈(29～31)、玉璧(32・33)、玉柄形器(31～34)、玉垂飾(35)、玉環(36・37)、玉璜(38～40)、玉動物型飾(41)、玉長方形飾(42)が出土している。石器としては砥石(43)が出土している。

4 構築過程

ここでは、郭家莊 160 号墓の構築過程を考えてみたい（第 7 図）。

郭家莊 160 号墓の構築は、まず墓坑の掘削から始まる（①）。墓坑は墓壁をほぼ垂直に墓底まで掘り進める。次いで墓底に腰坑を掘り、犬と人を殉葬する（②）。その後槨室を構築し、周囲に土を入れて、二層台を構築する（③）。構築した槨室に木棺を運び込む。木棺内には被葬者と玉器などを置く。槨室では、殉葬者、飲食器・青銅楽器、青銅武器の順で副葬品を安置する（④）。最後に蓋を閉め、絹織物を上にかける（⑤・⑥）。

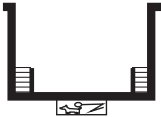
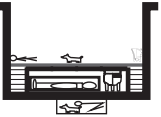
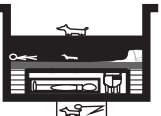
次に二層台上には西部に浅い穴を掘り、殉葬者を安置する。東部南側には銅戈をまとめて置く。東部北側には爵・觚・簋・高杯といった土器や牛骨や羊骨、さらに石磬を置く。殷墟遺跡では墓葬に副葬された陶器に獣骨や魚骨が入った状態で出土した例があり、郭家莊 160 号墓でも陶器にも食物が盛られていた可能性がある⁵⁾。またやはり殷墟遺跡では墓葬に副葬されていた漆器上に牛骨が置かれていた例もあり、同様にここでの獣骨も漆器にのせられていた可能性がある⁶⁾。この二層台東部北側での獣骨と酒器である爵・觚がまとまって出土したことについては、殷墟遺跡での祭儀が飲食物を介したものであることを参考とするならば、この場で祭儀が行われた可能性が高い（祭儀 2）。このほか二層台には北部西側に漆器が置かれており、北部にはこのほか有機物が置かれていた可能性もある（⑦）。

その後墓坑を埋め戻す（⑧）。その過程で犬を使った祭儀を行う（⑨・祭儀 3）。

以上の構築過程とは別に副葬品の分襠鼎・有蓋提梁鼎からは肉や獣骨が出土していることから、木槨に運び込む前に祭儀が行われていたことがわかる。墓坑で行うことは難しいことから、埋葬が始まる前に墓坑外で行われたと考えられる（祭儀 1）。

5 郭家莊 160 号墓の墓制

以上の検討をふまえ、ここでは郭家莊 160 号墓の墓制について考えて

墓葬の構築過程	想定される祭儀
 ① 墓坑の掘削 ② 腰坑を掘り、人と犬を殉葬	
 ③ 槨室と二層台の構築	祭儀 1 青銅礼器を使う祭儀 (使った青銅礼器は、内容物をそのままにして、副葬)
 ④ 木棺・被葬者を搬入し副葬品を木槨内に置く	
 ⑤ 木槨に蓋 ⑥ 絹織物をかける	
 ⑦ 二層台や木槨蓋上に殉葬の人や犬、陶爵・觚・簋、牛・羊骨などを置く	祭儀 2 陶爵・觚・簋と家畜などを使った祭儀
 ⑧ 墓坑を埋め戻す ⑨ 途中で犬を埋葬する	祭儀 3 犬を埋葬する祭儀
 ⑨ 地表面まで埋め戻す	

第 7 図 郭家莊 160 号墓構築過程

みたい。検討にあたっては、二つの視点を設定する。その一つは木槨木棺内に安置された被葬者と副葬品であり、いま一つは墓葬内で確認された祭儀である。

(1) 被葬者と副葬品のあり方

墓葬の基本は被葬者の遺体を安置する場所である。しかし中国古代の墓葬からは、遺体だけではなく、多数の副葬品や殉葬が出土する。いうまでもなく、墓葬を造営するのは、被葬者の後継者であり、ここでは被葬者に直接関わる副葬品や殉葬から、墓葬を造営した後継者の意識を考えてみたい。

① 副葬品の性格

被葬者に直接関わる副葬品が出土したのは、木槨・木棺内、二層台であるが、量的に最も多かったのは木槨・木棺内である。木槨・木棺のうち、木槨内からは主に青銅礼器、陶器、武器、車馬具が、木棺内からは主に玉器が出土している。以下それぞれの内容について見てゆく。

1) 木槨内

副葬品のうち最も点数が多かったのは、青銅礼器、特に青銅飲食器である。煮炊器の中には底部にススが付着したものがあり、さらに内容物が残っていたものもあることから、これら青銅飲食器が、埋葬のために実際の利用を想定せずに作られた明器ではないことがわかる。副葬された青銅飲食器は煮炊器、盛食器、酒器といった組み合わせとなっている。その多くには「亜址」の図象名があり、いくつかには「亜窆址」がある。これら青銅礼器が図象名を共有していることは、製作の契機や時期の同一性は確保できないものの、少なくともある集団に向けて特化して製作されたものであることは間違いない。以上のことは、これら青銅飲食器が、副葬される前に個別に存在していたのではなく、ある集団において一つのまとまりとして存在していたことを示している。このことと、青銅飲食器が祭儀に用いられた器物であることを考え合わせるならば、副葬された青銅飲食器は被葬者が属する集団において祭儀に使われていた道具のセットであったと考えられる。さらに青銅飲食器は、階層上位の墓葬に副葬されることが知られており⁷⁾、従って青銅飲食器を用いた祭儀とは、社会の上位階層により、自らの地位に相応しい活動の一環で

あったことがわかる。つまり、被葬者が属した集団は、その社会的地位に相応しく青銅飲食器を用いた祭儀を行っていたが、被葬者の埋葬にあたり、その祭儀に使っていた道具一式を副葬したのである。

青銅武器は多数が出土している。ただし木槨内からの出土がないことから、これら多数の青銅武器が被葬者の個人的な持ち物であったとは考えられない。出土した武器の中には実用品ではない個体も含まれ、さらにそれが実用的な個体とは区別されずに副葬されている。以上の状況は、副葬された武器は実際の戦闘に使われていたものではなく、被葬者の生前の地位を表現する象徴的な器物として使われていたことを示唆している。このような身分を表す器物としては、ほかに車馬具を挙げることができる。

以上の検討から、墓葬の造営者は、被葬者が生前に属していた社会階層での活動で使用した器物やその社会階層を表現するに相応しい器物を選んで木槨内に副葬していたことがわかる。

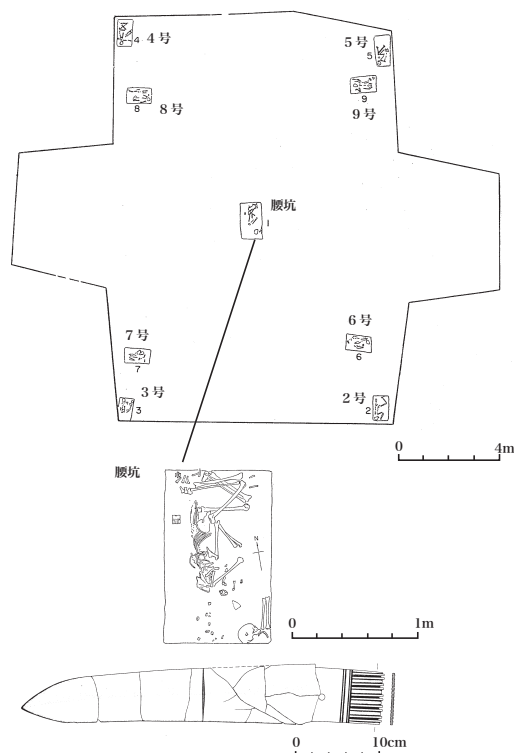
さらに木槨内には2名の殉葬者が確認されている。これら殉葬者は武器などの副葬品を持っておらず、そのため被葬者を守護するなどの役割を想定することができない。従ってこれから殉葬者は被葬者に仕える存在として埋葬されたと考えることができる。

以上の検討から、墓葬構築者は、被葬者の生前のあり方を基準として、社会的な身分を表現する器物を選択し、また被葬者に仕えた人物を想定して木槨内の副葬や殉葬を構想したと考えることができる。

2) 木槨内

木槨内からは玉器が多く出土し、これに少数の石器・工具が加わっている。

殷墟における玉器の位置づけについては、殷王墓と考えられる侯家莊1001号墓での出土例が参考となる。1001号墓では墓底に殉葬坑が9基確認され、それぞれ殉人と殉犬が確認された。木槨下の殉人や殉犬については、殉人が武器を持つ例があることから、墓葬を守護する目的があったと考えられる。ただし殉人や殉犬の位置が墓坑埋土内のように外部に向けたものはないことから、想定される敵対者は、盗掘者のような人間ではなく、被葬者に害を及ぼす霊的存在であったと考えられる。つまり、玉器には霊的存在に対する防御という、呪術的な存在としての性格が備わっていたと考えられる。



第8図 侯家莊 1001 号墓墓坑底部の殉葬

侯家莊 1001 号墓の殉人は第8図のように配置されているが、このうち周辺の8体は青銅戈を副葬し、中央、すなわち木棺直下と考えられる殉人は、玉戈を副葬していた。この殉人のうち、より重要なのは木棺直下の殉人と考えられる。その殉人のみが玉戈を所持していたことは、霊的なものへの対応は、玉器の方が青銅器よりも効果的であったと考えられていたことを意味している。さらに玉器が出土する墓葬も限定されることから、階層上位者の持ち物であったと考えられる⁸⁾。

郭家莊 160 号墓で出土した玉器には、玉戈・玉鉞のような武器型や玉璧のような象徴的なものがあり、地位の表象としては相応しいと考えられる。同時に柄形器や玦、動物型玉器のように、より個人的な器種も存在する。このような玉器が区別なくまとまって木棺内から出土したことは、玉器には社会的な地位を表現するという機能もあるが、墓葬におい

てはその呪術的な性格がより重視されていたためと考えられる。

ここまでの検討をまとめると以下ようになる。

木槨・木棺内の副葬品や殉葬については、墓葬の造営者により、被葬者の生前のあり方に準拠して選択がなされたと考えられる。木槨では被葬者の社会的な身分を表現する器物や被葬者に仕えた人物が選択され、木棺には霊的な存在から被葬者を護ることを目的に玉器が主に選択されたのである。

(2) 祭儀

祭儀については必ずしも全ての祭儀が痕跡を残すわけではなく、また推測の域を出ないものもあるが、本稿での検討では郭家荘 160 号墓においては、被葬者の埋葬前、被葬者や木槨への副葬品の埋納が終わり木槨の蓋を閉めた段階、墓坑埋め戻し中、の3度にわたる祭儀の実施が推定された。このうち、埋葬前、木槨の蓋を閉める段階の祭儀は、食物や酒を捧げる祭儀が行われている。このような飲食物を捧げる祭儀は、殷墟ではもっとも一般的であり、被葬者を対象とした祭儀と考えられる。

墓坑埋土から出土した犬については、腰坑の例もあり、墓を護るという役割が期待されていたと考えられる。この犬については、墓葬を護るために埋葬されたという可能性もあるが、土坑などが伴わないことから、祭儀の犠牲としたものと考えたい。ここで行われた祭儀は、被葬者に対するものではなく、墓葬を護るためのものであったと推定される。

最後にここまでの検討をまとめて、郭家荘 160 号墓の墓制についてまとめてみたい。

郭家荘 160 号墓には二つの性格が認められた。その一つは被葬者の遺体とともに、関連する副葬品や殉葬者を安置する場である。副葬品や殉葬には被葬者の社会的な身分を表現する器物や被葬者に仕えた人物が想定され、特に木棺内には被葬者を霊的な存在から護る玉器が置かれていた。いま一つは、埋葬に伴う祭儀の場である。祭儀は埋葬前、被葬者安置後、墓坑埋め戻し、といった段階でかなり煩瑣に行われていた⁹⁾。

このような郭家荘 160 号墓の墓制は、筆者が先に検討を加えた殷墟第4期の太史公村 303 号墓でも確認されている¹⁰⁾。このことは、本稿で明らかにした中型墓の墓制が遅くとも殷墟第3期には成立し、それが第4

期に継承されていたことを意味している。

おわりに

本稿での検討により、殷墟中型墓の墓制については、少なくとも殷墟第3期から第4期にかけて連続して存在していたことが明らかになった。この成果をもとに、王墓の墓制について、予察を試みてみたい。

王墓については、盗掘が激しいことからその墓制を復元することが難しいことは先に述べたとおりである。ただし、これまでの検討から、王墓は死者である殷王を安置するとともに、王が生前の生活を継続するための器物や殉葬者を安置する場所であり、同時に祖先神となる王に対する祭儀の場としての機能を具えた施設である、と考えられることが明らかになっている。墓葬に被葬者や副葬品・殉葬者の安置場所と祭儀の場といった性格があることは、これまで検討してきた中型墓の郭家荘160号墓や大司空村303号墓でも認められた。このことは、殷墟における墓制が、その質や量の違いはあれ、王墓とそれ以外の墓葬においても共有されていたことを示している。従って、王墓に副葬された器物についても、郭家荘160号墓や大司空村303号墓の組合せを拡張することで、推測が可能になると考えられる。

殷墟遺跡中型墓の墓制については、これまでの検討で殷墟第3期、第4期については明らかにすることができた。今後は第3期には確立していた墓制がどのようにして形成されたのかを、これに先行する時期の中型墓を検討することで明らかにすることが課題となる。

(本論文は本研究はJSPS 科研費 23H03923 の助成を受けたものです。)

注釈

- 1) これまでの殷王朝や殷墟の墓葬についての代表的な研究として以下のものがある。
胡進駐『殷墟晚商墓葬研究』(2010年 北京師範大学出版社 北京)
郜向平『商系墓葬研究』(2011年 科学出版社 北京)
- 2) 小澤正人「殷王墓の墓制についての一考察」(『成城文藝』261号 2023年)
- 3) 小澤正人「殷墟大司空村遺跡303号墓の墓制についての一考察」(中村慎一編『中国文明起源の考古学』所収 2024年 雄山閣 東京)

- 4) 中国社会科学院考古研究所『安阳殷墟郭家莊商代墓葬』(1998年 中国大百科全书出版社 北京)。なお、以下の図版はいずれもこの報告書に依る。
- 5) 中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告』(1987年 文物出版社 北京) 213頁、216頁、219頁、221頁、223頁。
- 6) 中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告』(1987年 文物出版社 北京) 259頁。
- 7) 注1参照
- 8) 梁思永、高去尋『侯家庄第二本 1001号大墓』(1962年 中央研究院歴史語言研究所 台北)
- 9) 殷墟の墓葬において、墓葬構築中に祭儀が行われていたことについては、唐際根が指摘している。
唐際根 「殷商時期的“落葬礼”」(古方・徐良高・唐際根編『一剣集』所収 1996年 中国婦女出版社 北京)
- 10) 注3参照